

理事長室から

木下 統晴



良い研究、良い教育の基本

4月2日の入学式から1カ月、爽やかな5月を迎えました。大学構内では、3月中旬から咲き始めた桜、姫林檎の花も散り、今、桜桃（さくらんぼ）が沢山実っています。食べてみましたが、おいしいです。上の方の桜桃から鳥が食べるので、多分、そちらが、もっとおいしいのでしょう。躑躅（つつじ）、タイム（ハーブ）も大学の玄関横で花を咲かせています。季節が移り変わり、構内を巡ると色々な発見があります。総務課の沖村さんから、花や樹木の名前を教えてください。知らないことを学ぶのは楽しいです。

アリーナに行って、素晴らしいと思うのが靴の並べ方です。アリーナをされる学生の皆さんがきれいに並べられています。また、お客様を案内し構内を歩くと、皆さんが大きな声で挨拶されます。お客様は、とても感心されます。人の命に携わる保健医療系のリーディング大学として素晴らしいと評価されています。

構内もきれいで、トイレ、廊下、

教室、構内環境の整備、清掃をお願いしている協力会の皆様のおかげです。

先日、動物実験棟の改修工事が完了、また、クリーンルームやP3レベル施設も整備していますが、研究室は普段からの管理がとても大事です。教職員、学生の皆さんが、設備や機器に愛情を持ち、大切に取り扱い、きれいにする。これが良い研究、良い教育の基本になります。それらを学生時代に身につけ、社会人として大きな強みにして欲しいと思います。思慮、仁愛は大切な教養です。



竹熊教授に日本看護協会会長表彰

在宅介護啓もうや
看護職養成に貢献

看護学科の竹熊千晶教授が2023年度の日本看護協会会長表彰に決まりました。6月7日に千葉・幕張メッセで開かれる同協会通常総会ので表彰されます。

大学教員として長年にわたり看護職の養成にあたるとともに、県民に在宅介護の啓もう普及に取り組んできた功績が認められたものです。竹熊教授は、昭和60年に御所浦町（現天草市）の保健師としてそのキャリアをスタート。その後、病院看護師や九州看護福祉大学助手を経て平成15年から本学で教鞭を執っています。一方で、平成22年には熊本市内の民家を借り上げ、九州でも数少ないホームホスピス「われもこう」を開設。看取りを行う家族を支援し続けています。

今回の表彰について竹熊教授は「大変光栄に思います。目の前におられる対象となる人への看護は決して1人でできるものではありません。仕事として続けさせてくれているみんなのおかげだと思っています」と感謝の言葉を口にしていました。（入試・広報課）



「看護は決して1人でできるものではありません」と語る竹熊教授

全学1年次生を対象とした必修科目「アカデミックスキルⅠ」は、ライティングやプレゼンテーションといった「伝える」技術の習得だけでなく、学生の中に学びに対する「構え」をつくることを目指しています。アカデミックスキル支援センターが全面支援する形で開講されており、コンテンツづくりには同センターの学生指導員も深く関与。時には教壇に立つなど、学生を主役にした授業が繰り広げられています。(NL編集部)

主役は学生「アカデミックスキルⅠ」



穏やかな語り口でメールの送り方などを説明する中山さん

先輩から後輩へ
メールのコツ伝授

本年度第3回授業では「メールマナー講座」と題して、同センター学生指導員の中山慶亮さん（医学検査学科4年）が教壇に立ちました。

授業内容を考えるにあたり、中山さんは学生のメールマナーの現状を知るため、本学教職員を対象とした「学生のメールに関するアンケート」の実施を提案。年明けに行った調査結果を基に、2カ月がかりでテキスト風のオリジナル資料を作成しました。

授業本番では、事前に用意したスライドを示しながら、基本的なメールの書き方や注意点について、落ち着いた口調で後輩に語り掛けていました。授業を終えた中山さんは「まさか大学生活の中で授業をする日がくるとは思っていませんでした。難しい部分もありましたが、とても貴重な経験が出来ました」と笑顔を見せていました。

授業支えるリーダー学生 過去最多24人 研修始まる

センターでは、授業と並行して新人リーダー学生への研修を行っています。リーダー学生とは、2年次前期まで続く「アカデミックスキル」科目をサポートするため、自主的に手を挙げてくれた学生たちです。本年度は過去最多となる24人（医学検査学科7人、看護学科9人、理学療法学専攻7人、言語聴覚学専攻1人）の1年次生が名乗りを上げてくれました。

研修会では授業内容を先行して体験し、授業中、他の受講生をサポートしていきます。5月2日（火）にキャンパステラス奥の学習室であった第2回研修会では、冒頭、渡辺雄一センター長が「一般の学生たちに先んじて学修することは大変

なこともあります。ユニークで可能性を秘めたアカデミックスキルⅠの授業を面白くしてくれることを期待します」と激励しました。

今年のアカデミックスキルⅠでは、学生たちが、寸劇、動画、紙芝居、ホワイトボードを使ったレクチャーのいずれかの方法を通じ、小学生に体の一部をわかりやすく説明するという課題に取り組みます。この日は、リーダー学生たちが6班に分かれ、センターの学生指導員たちが集めた参考図書などを基に発表する体の部位を話し合いました。

研修会は週2回程度開かれ、今後は情報収集や、アウトライン・絵コンテづくりなどに取り組みます。



過去最多の24人が手を挙げたリーダー学生。授業を先取りした内容の研修会がスタートしました



先輩でもある学生指導員が集めた資料に目を通しながら、話し合う学生リーダーたち



荒木 栄一
健康・スポーツ教育研究センター
特任教授（センター長）

糖尿病はインスリンの分泌と作用の障害により発症します。私はインスリン作用機序を研究しています。インスリン受容体のチロシンキナーゼ活性が作用発現に必須であることや、受容体の作用を分岐伝達していく基質IRS-1を同定し、さらにIRS-1KOマウスの解析により新たな基質IRS-2を発見しました。また糖尿病患者のインスリン作用障害にIRS-1遺伝子異常が関与する事を示し、温熱と微弱電流の同時負荷によりインスリン作用障害が改善し糖尿病患者の血糖管理が改善することを報告しました。今後も糖尿病の予防や治療に役立つ研究をやっていきたいと思っています。



岡 順子
看護学科教授

2023年4月から本学に着任しました。前職、熊本県庁では行政職員として主にメタボや循環器病等の生活習慣病対策、災害医療や医療人材確保などの医療政策に携わってきました。これまでの経験を活かしながら、これからの課題である団塊ジュニア世代が高齢期を迎える2040年問題を見据えた健康寿命の延伸を支える仕組みづくり、直接住民と向き合う若手保健師を育成するための行政における管理職のあり方に関する研究に取り組んでいきます。

2040年問題見据えて

糖尿病予防と治療に寄与

私の秘話
★
ヒストリー

看護学科

吉野 拓未講師



土地に馴染む

ベーターベンの79回、葛飾北斎の93回には及びませんが、大学進学から、これまでに引っ越しを十数回してきました。新しい土地に移り住むのは、不安もありますが、私はワクワク感の方が大きいです。

私が引っ越し後にまずすることは、カーテンの取り付けです。当たり前のように感じますが、家具よりもカーテンです。看護師の時に、夜勤明けに感じるけだるい日光を、カーテンが一瞬で夜にしてくれていました。それから、何よりも窓枠を測り、合った遮光カーテンを買いに行くのが、引っ越しの第1歩となりました。

家が落ち着いたなら、その土地に馴染んでいけるのかも楽しみにしています。私は、散髪するところが決まった時に「馴染んだ」と感じられます。初めての土地だと、いろいろな理容店にいらっしゃるのですが、気に入った理容師さんとお店が見つかる「この土地に馴染んだな」と感じます。

熊本に来て2年目ですが、ようやく馴染んできたと感じています。

インフォメーション

週間行事予定（5月13日～19日）

5 / 15（月）

開学記念日（休日）